

日本民家園だより

特集 民家・民具と妖怪

vol. 102

ミニ企画展 「妖怪de古民具」

令和7年7月1日（火）～8月31日（日）



ザシキ

ザシキは平入主屋の前通り上手側の部屋で、床の間などを備えた公的な空間としてさまざまな接客に用いられ、冠婚葬祭の儀式、講や神迎えの行事、寄り合いなどを行います。家族でも日常は立ち入らず、雨戸を閉め切っていたり畳を上げていたりする場合があります。家の主人以外は入ってはいけない、といった家もありました。上層農家では、役人などの正客を直接ザシキに上げるため、家族の出入り口とは別に玄関（式台）を設けていました。

写真・間取り：旧工藤家住宅

民具のある日常と妖怪

【事例1】ヨコヅチヘビ

越後南蒲原郡の或堤防の上の路には、以前ヨコヅチヘビ（横槌蛇）というものがいたという。頭も尾も一様の太さで、ぴょんぴょん跳ねて動いていた云々（『妖怪談義』より）

横槌

豆類や麦の脱粒、脱穀、穀落としや藁打ちなどに使用します。叩く対象によって大きさや形態が変わり、重量も決まっています。材質は弾力性のある堅木で、ヤマグワやカシが向いています。

横槌には魔除けや呪力があるとする地域もあり、小正月のめぐら打ち行事に使ったり、村に死者が続くと後続を断つため死者と埋葬したりする地域もあります。



横槌

ヨコヅチヘビと横槌の関係

鳥取県八頭郡の世間話に「果樹園の下の荒れ畠で、ポッテンポッテンと荒草をたたく物音がするので行ってみると、大きな丸みをした物体が荒れ畠の中に消えていった」とあります。ポッテンポッテンというのは、まさに槌で藁を打つ音。まだ木槌（砧）を日常で使っていた時代、ぴょんぴょん跳ぶ（叩く）姿やポッテンポッテンという音は生活の中にありました。そのような時代、ヨコヅチヘビは典型的な器物の妖怪でした。同じく槌の妖怪に「テンテンコロバン」がありますが、これは槌がコロコロ坂を下ってくるというものです。



木槌で藁を打つ様子（2025年撮影）

協力：民具製作技術保存会

この槌に似た形の蛇の妖怪がツチノコです。切られた大蛇の頭部と説明される場合も多く、祟りがあつたり猛毒を持ったりと人間にとって恐ろしい存在です。ツチノコがゴロゴロ転がってきて当たれば死ぬと伝えている地域には、実は土砂災害の危険が高い地域も多くあります。ツチノコは、現代で国土交通省が提供する「きみの街にひそんでる！気をつけ妖怪図鑑」の元祖だったのかもしれませんが。

また、槌に似た蛇の妖怪は、そのかわいらしい形がキャラクター化され、妖怪ではなく未確認動物「つちのこ」として地域振興に役立っているケースもあります。たとえば、岐阜県加茂郡東白川村では毎年つちのこ探しイベント「つちのこフェスタ」が開催され多くの参加者で賑わっています。

民具の音

【事例2】シズカモチ

夜中にくつこつと遠方で餅を搗くような音を、人によって聴いたり聴かなかつたりする。静か餅を搗き出されるというのは、その音がおいおい遠くへ行くと家で家の衰える前兆、これに反してだんだん近く聴えると、搗き込まれたとって運が開ける。その音を聴いた人は後向きに箕を突き出すと、その箕へ財宝が入ってくるとまで言われている（『妖怪談義』より）

臼と杵

穀物の脱穀・精白、餅搗きなどに使う道具。餅搗きを使う搗臼は、木製で、元々は臼杵とともに使い胴の中央が鼓のようにくびれた形でしたが、横杵が使われるようになると今のような円柱形になりました。

餅は正月や祝い事の際に供える特別な食べ物であり、年始や五節供、吉凶のまじないに搗いて食べる慣習があります。餅搗きの音がある、餅をもらうというのは吉兆と捉えられたのでしょう。

箕

脱穀した穀物を選別したり、近距離での運搬に用いる農具。ちり



上から 臼
杵
箕

とり形の箕は、中に選別する穀物を入れ、両手で上下にあおるようにすると風が起きて軽いゴミや藁くずが外に飛び出したり前方に寄り、重い実が後方にたまりまゝす。

また、箕が正月や十五夜にお供え物を入れる容器として使われたり、親が厄年に生まれた子どもを入れて捨てる真似をしたりするなど、年中行事や儀礼に使われる習俗が各地に見られます。

異界から聞こえる生活音

その場にはありえないはずの音が聞こえる…という音の怪異、聴覚を刺激する怪異は全国各地に多く伝わっています。シズカモチはその一例です。人里離れた山中で聞こえるのこぎりおの音「木切り坊」は「天狗倒し」や「空木倒し」等と同様の音の怪異で、人をだます狐狸貉の仕業とも山の神や天狗の度胸試しとも言われます。里では誰もいないはずの坂で葉缶や臼が転がる音、小川では小豆を研ぐ音が聞こえ、水底からは機織りの音…等々の怪音が伝わる地域もあります。そのようなありえない場面で聞こえる音を解釈するための装置のひとつが妖怪といった存在でした。

触れる妖怪

【事例3】ノブスマ

前面に壁のように立ち塞がり、上下左右ともに果がない。腰を下ろして煙草をのんでいると消えるという。東京などでいう野衾は鼯鼠か蝙蝠のようなもので、ふわりと来て人の目口を覆うようにいうが、これは一種の節約であった（『妖怪談義』より）

衾

衾とは、寝るときに上から体を覆う夜着・寝具。着物と同じ形で、全体に綿を厚く入れます。

触覚で捉える妖怪

突如何もないはずの場所で行く手を遮る何かがあり、それを視覚で捉えることができず触覚だけが頼りだったとしたらたいへんふしぎで不安な体験となるでしょう。このような現象も妖怪の仕業であると考えられました。例えば、ここで紹介するノブスマやヌリカベ。他にも、頬をなでる「ホオナデ」や節分の夜に尻をなでる「カイナデ」、道行く人の袖をひっぱる「ソデヒキコゾウ」などがあげられます。

妖怪と民家

【事例4】ザシキワラシ

旧家にはザシキワラシと云ふ神の住みたまふ家少なからず。此神は多くは十二三の童児なり。折々に人に姿を見ることがあり。土淵村大字飯豊の今淵勘十郎と云ふ人の家にては、近き頃高等女学校に居る娘の休暇にて帰りてありしが、或日廊下にてはたとザシキワラシに行き逢ひ大いに驚きしことあり。これは正しく男の児なりき。同じ村山口なる佐々木氏にては、母人ひとり裁縫して居りしに、次の間にて紙のがさがさと云ふ音あり。此室は家の主人の部屋にて、其時は東京に行き不在の折なれば、怪しと思ひて板戸を開き見るに何の影も無し。暫時の間坐りて居ればやがて又頻に鼻を鳴す音あり。さては座敷ワラシなりけりと思へり。此家にも座敷ワラシ住めりと云ふこと、久しき以前よりの沙汰なりき。此神の宿りたまふ家は富貴自在なりと云ふことなり。（『遠野物語』より）



移築前の工藤家（1967年）

衾（夜着）



ザシキワラシはなぜザシキにいるのか？

ザシキワラシは元々聴覚でとらえるもので、視覚的な妖怪ではありませんでした。ザシキは祝儀不祝儀や特別な客がない限り暗く閉ざされた空間で、家人はそこに子どものいるような音や声、気配を感じました。また、「客間」にいて家に富をもたらす「特別な童子」であるザシキワラシは本来転居可能な「神」だったと考えられます。そのザシキワラシを視覚化する、すなわち他人に見える状態になることは、実は家の没落のはじまりだとも考えられます。工藤家（岩手県紫波町）の家人は移築前のザシキでザシキワラシの気配を感じたことはあったそうですが、見たことはなかったそうです。

「暮らし」を知らないと、妖怪の“本当”はわからない・・・

【事例5】センボク、カンボク

怪物の名、死人のある家のカケミシロにいる。1週間たつとオートの外に出るが番入してるもので3週間は家にて4週間位で墓場に行く。顔は人間に似て四つ足のもの、ドンビク（蛙）の大きいもの、即ちガマと同じものだ。

（民間伝承の会『民間伝承』6巻8号、1941 金子総平「土を食べる狼」より）

カケミシロ

カケミシロ（カキムシロ）とは、下げ籠^{むしろ}のこと。五箇山地方の合掌造民家では、出入口に簾状の籠を吊り下げました。移築直前の野原家の写真には、出入口にこのカケミシロを下げているのが見られます。

地方の暮らしと妖怪の性質

センボク、カンボクは、水木しげるの妖怪漫画や「妖怪ウォッチ」にも登場する、現代ではポピュラーとなった妖怪のひとつで籠や笠を被った蛙の姿で描かれます。ただし、富山県五箇山地方の合掌造住宅での生活ぶりを知らないと、この妖怪の容姿を勘違いしてしまうかもしれません。

センボク、カンボクが伝わる利賀村^{とがむら}に暮らしていた野原家の葬儀を参考にしましょう。葬儀は準備から通夜、葬式、火葬まで隣組で行いました。亡くなった人はデエに寝かせ通夜の際に丸い棺桶に入れザシキに移します。ザシキには祭壇が組まれ組の男たちが作った紙の花などが飾られます。翌日の葬式にはお寺さんをお経をあげた後、焼き場（火葬場）に運びます。大勢の来客やお坊さんの出入口は、普段家族が入り出す戸ではなく踏み石の置いてあるザシキ側の廊下から入ります。

さて、五箇山地方では遺体に籠を敷くとか掛けるのかといった習慣はなく、カケミシロは家屋の出入口（オート）に掛け、戸を閉じているときや開け放したいときには巻き上げていました。センボク、カンボクは初七日の間、その日常の出入口を内側から守り、その後3週間ほど戸の外側で家を守っている、そんな妖怪なのです。



図版・写真ともに移築前の野原家（1965年）

掲載した写真・図版・イラストは、すべて当園職員により撮影または制作しました。無断転用はお断りします。

参考・引用文献

- 日本民家学会編『日本民家辞典』ぎょうせい、1997
- 『藤田園男全集2』『遠野物語』筑摩書房、1997
- 『藤田園男全集20』『妖怪談義』筑摩書房、1999
- 川島秀一『ザシキワラシが見えるとき—東北の神霊と語り—』三弥井書店、1999
- 福田アジオ他編『日本民俗大辞典』上・下 吉川弘文館、(上)1999 (下)2000
- 日本民俗建築学会『図説民俗建築大事典』柏書房、2001
- 小坂谷福治『奥五ヶ山の村』上平科教育委員会、2002
- 伊藤龍平『ウチノコの民俗学—妖怪から未確認動物へ—』青弓社、2008
- 小松和彦監修、常盤徹他編『日本妖怪妖怪大事典』東京堂出版、2013
- 香川雅信・飯倉義之他編著『47都道府県・妖怪伝承百科』丸善出版、2017
- 岩井宏實監修、工藤良功編、中林啓治作画『絵引民具の事典（普及版）』河出書房新社、2017
- 松本孝三『昔話伝承のフォークロア—畏怖と安寧の語り—』平安書院、2022

日本民家園だより vol.102

発行：令和7（2025）年7月1日

川崎市立日本民家園 URL <https://www.nihonminkaen.jp/>

〒214-0032 川崎市多摩区砦形7-1-1 TEL 044-922-2181 FAX 044-934-8652

交通 小田急線「向ヶ丘遊園」駅下車南口より徒歩13分

開園時間 [3月～10月] 9時30分～17時 [11月～2月] 9時30分～16時30分（入園は閉園30分前まで）

休園日 毎週月曜日（祝日の場合は開園）、祝日の翌日（土日・祝日の場合は開園）、年末年始 ※臨時休園あり

入園料 一般550円、高校・大学生330円（要証明書）

65歳以上330円（川崎市在住の方無料、要証明書）、中学生以下無料

